

絵のスタイルから昔話絵本を考える

—「かさじぞう」を例として—

武田 京子*

(1992年12月11日受理)

Kyoko TAKEDA

A Consideration on Picturebook of Folktale: Through Drawingstyle

昔話絵本「かさじぞう」の絵に着目し、読者の絵に対する好みとストーリーの持つ雰囲気との関わりについての研究である。

絵のスタイルに重点をおいた調査と、文章も含めた調査を行なった。「ストーリーの持つ雰囲気が出ているか」よりも、こども向けに「無難な」「かわいらしい」ものが、好まれることがわかった。

〔キーワード〕 昔話、絵本、絵のスタイル、ストーリーの持つ雰囲気

1. はじめに

絵本は、様々な児童文化財の中でも「読んでもらうことが必要」ということから、親と子のかかわり、コミュニケーションの度合いを非常によく示すものである。しかし、絵本を購入する場合には、「絵がかわいらしくて子ども向きだから」、「有名な出版社のものだから」、「値段が手ごろだから」というような、絵本が児童文化財として果たす役割と無関係な視点から選択している場合が多い。子どもが読書活動の出発点で出会う絵本は、文章、絵、色彩、造本等の点に細心の注意を払い選択する必要がある。なぜならば、絵本は、想像力や感性を育てるのに非常に有効な児童文化財だからである。

絵本は、絵のみ、或いは絵と文章が融合して創られた「芸術作品」であり、読者の関心は、絵（挿し絵）に比重が多くかけられ、絵本を選択する際に絵が指標になる場合が多い。しかし、その場合、絵のかわいらしさに関心がゆき、絵の質、芸術性、ストーリーとの適合性などは、無視されてしまう場合が多い。

そこで、本研究では、昔話「かさじぞう」の絵本を例として、ストーリーの持つイメージにもっとも適合した絵はどういうものか、を明らかにすることによって、情操を豊かにし、イメージの世界を広げて行くことを可能にするような読書環境を整備していく為の一つの手がかりとしたい。

*岩手大学教育学部家政科

II. 研究方法

「昔話に登場する人物（動物）たちは、善か悪か、強か弱か、いじわるか優しいかなどの、人間のもつ最も根源的な性格特徴をもつ元型をくっきりとわかちもっています。このような性格特徴を持つ主人公たちが、それらを極限までむき出しにしてぶつかり合うストーリーは、子どもの自己中心的思考と強く触れ合います。」¹⁾と佐々木が述べるように昔話のシンプルでわかりやすい筋立てと素朴な論理は、幼い子どもが想像の世界を作り出していくのには有効である。

「かさじぞう」の物語は、様々なかたちで全国各地に伝えられており、貧しいが、誠実で心優しい老人夫婦が、他人に親切をすることによって幸福を得るという物語である。「貧しい」という言葉に現実味がなくなり、自然を破壊する、人を押し退けてのし上がり、わが身のことばかり考えていく人間の多くなった現代において、忘れがちになるものを「かさじぞう」は思い出させ、イメージを大きく膨らませることも可能である。

「かさじぞう」の絵本は、筆者が手にしたものでだけでも52冊あるが、本研究では絵本着目し、絵のスタイルによって5のタイプ別に分類した。既に「かさじぞう」のストーリーを知っている者（大学生・中学生）についてはスライドを用いた調査（量的測定）を行い、ストーリーを知らない者（幼児）については、家庭内に5タイプを代表するの絵本を常置してもらい、日常の読書活動の中でどのように読まれるか調査（質的測定）をおこなった。

「かさじぞう」の絵のスタイル

- ①写実的に描かれたもの（新井五郎絵、岩崎京子文 ポプラ社）
- ②アニメ・漫画風に描かれたもの（成田マキ絵、平田昭吾文 永岡書店）
- ③素朴に柔らかい色彩で描かれたもの（遠藤てるよ絵、吉沢和夫文 第一法規）
- ④場面ごとに人形や背景を構成し写真撮影したもの（高橋悦雄写真文 小学館）
- ⑤水墨画風に描かれたもの（赤羽末吉絵、瀬田貞二文 福音館書店）

上記のスタイル別代表例の絵本について、阪本²⁾の評価尺度を参考にして以下の10項目について評価を行い、点数化可能な(3)、(4)、(6)、(7)、(8)、(9)、(10)について、それぞれの絵本の得点を算出した。なお、(10)についてはズレのあった場合に1件につき減点1とした。

評価項目

- (1) ページ数
- (2) ストーリー
- (3) 言葉遣い（雰囲気・リズム感・地文と会話文・擬声語、擬態語の使い方・標準語と方言）
- (4) 文章の長さ
- (5) 一段落に対応する絵の数（画面割りのバランス）

- (6) 描画（ストーリーとの調和）
- (7) 色彩（ストーリーの雰囲気合っているか）
- (8) 絵本全体（造本、構成など）
- (9) 絵と文章のバランス（絵と文章の配置、量）
- (10) 絵と文章のズレ（一画面の絵と文章の食い違い）

評価結果（表1）

表1 各絵本についての評価

	3 言葉	4 長さ	6 描画	7 色彩	8 構成	9 バランス	10 ズレ	得点合計
ポプラ社	5	4	4	5	3	5	- 1	2 5
永岡書店	1	1	1	1	1	2	- 1	6
第一法規	4	4	4	5	5	5		2 7
小学館	4	3	3	5	1	5	- 2	1 9
福音館	5	4	5	5	4	5		2 8

合計得点が最低となった永岡書店刊は、『アニメ昔ばなしシリーズ』のなかの1さつであるため、シリーズとしての体裁を整えるために、登場する動物を増やしたりストーリーの複雑化をおこなっている。また、幼児向きのものによく見られる傾向であるが、動物を擬人化（二本足で立つ、もちつきをするネズミ、はしでごちそうをつまむきつね）している。このことは、民話の持っている素朴さを失う危険性につながる。

小学館刊は、『NHK・メルヘンシリーズ』全20巻の1冊でありページ数が統一されている。永岡のものとは逆に単純化が行われ、おじいさんが帰宅したのち地蔵が来訪するまでの場面が描かれていない。絵本は、表紙・見返し・扉・本文・裏表紙という要素によって構成されるが、これは、裏表紙にまでストーリーが続いている。写真絵本であり他の絵本とは違った印象を受ける。セラミック（陶器）でつくった登場人物や背景を写真に撮ったものであり「本物」らしい質感や立体感がある。手足や体は場面に応じてさまざまに造られているが、顔の表情は1種類で、場面が変わっても表情は同じである。また、セラミック特有の輝きが肌につやをあたえるせいか、老夫婦の顔がまるで若者のようにみえる。

ポプラ社刊は、岩沢・小松崎³⁾による民話絵本選定では5点満点の3点の評価を受けた。その評価理由を「地蔵の描き方が生々しく、石の地蔵というより、人体を感じさせる。絵は、子どものイメージをふくらませるもので、限定するものではない。」としている。地蔵が荷を引く場面ばかりでなく、もちつきのまねをする、良い正月を迎えたなど、読者の想像にまかせるべきところを絵で表現してしまい、昔話の本来もっている「こどもの想像

